古今佛祖明題集

冬之部

中村俊定文庫
文庫 18
409
4

德川文庫

古今俳諧四題集冬部目錄

更衣（コロモカヘ） 初集
雪見（シリビ） 後二玉
木枯風（コガラシ） 後六玉
炕（コタツ） 九
炭窯（スミカマ） 十
達磨忌（ダルマキ） 十一
紙衾（フスマ） 十二
醪樽（ドブ） 十四
亀（カモ） 十四
寒の明（カンノアケ） 十六
閑懐菓子切（ヒマヒキリ） 初
冬日（フユノヒ） 六
冬隠（フユゴモリ） 後七玉 八
種火（ウヘビ）
雪猪（サノシ） 十一
十夜（ジウヤ） 後十一玉 十二
紙子（カミシ） 後十二玉 十三
水鳥（ミヅドリ） 十四
水炬（ヒ） 十五
猟（カリ） 十六
小春（コハル） 後初玉 二
冬用（フユヨウ） 六
火鉢（ヒバチ） 後八玉 九
猪牡（ボタ） 十
残菊宴（ザンキクノエン） 十一
足洗須溝（アシアラヒ） 十二
頭巾（ヅキン） 後十三玉
紫雲雀（ヒバリ） 十四
鯨幕（クジラマク） 十五
雉穴居（キジアナコモリ） 十七

蛭蟎　十七
河豚魚　十八
枯芒花　二十
葉蕎挽　後二十五
麦蕎　後廿一五
牡丹　廿二
金剛纂　廿三
蕨紅葉　廿四
枯柳　廿六
冬至梅　廿八
雪　後廿九五

沙鮫　十七
魚麗寺　十八
枯蕎　二十
茶蕎挽　廿一
素吾花　廿二
紫梅花　廿三
枇杷花　廿三
藤葉　後廿四五
寒　後廿六五
鷹賣　廿八
霰　廿二

麺條魚　後十七五
枯野　十九
蕎麦刈　二十
生姜掘　廿一
冬牡丹　廿二
紫花　廿三
鬼箭　廿三
冬木立　廿六
冬瓜　廿八
雲　後廿八五
沙柱　廿二

氷　後廿二五
神楽　廿四
祈歌　後廿四五
水仙　廿六
緑梅　廿七
寺と忘佛
菊季節　後廿八五
菜摘　後廿九五
菜摘　四十
菜志　四十一
裾帯菜刈神事　四十一
歳暮　四十二

蟹屋　廿四
里神楽　廿四
濃多　後廿五五
寺蔵　廿六
寺山菜　廿七
寒声　廿八
臘八　廿九
漬掃　四十
儀　四十一
年籠　四十一

猪鼻　廿四
素蕎麦　廿四
海鮫捻　廿六
寺梅　廿七
寒垢離　廿七
鶯菓　廿八
鮒卵酒　廿九
餅搗　四十
歳暮夫祭　四十一
宝舟　四十二

宮城県図書館

中村俊定文庫

古今俳諧明題集冬部

更衣 こころも

落ちぶれど紙くはいやしおゐもかへ　一嵐
布ゝ〻重に着せゝりこころをうへ　徒庵
着ハ皆除紙捨ゝ〻ゐをかへ　似竹
きうまし袖へぐ侍や更衣　水雁

閑憐ろひらき菓ロ切さく所

憐ひ〻紀や一梅咲ゝかし思ま里　青原舟中素路
憐冥や沢巾も菓ロのうげふうし　麦舟
憐冥や巻ゝ袁ひもおりゐ誘ゝ或　麦舟

懐ひ〳〵さや掃出せば梅さぐ紀　一巖
又ひ〳〵紀や繰〳〵まひいて暖まる　江戸入
に切やふさ房ハ紀むく〳〵も　湖十
懐冥や雲にも名の志せあり　青蓋

小春　こはる

年時中に一時ぞうつる小春　理然
鶴の羽紀素紀〳〵ぬ紀小春　涼休
郭公ぞ芳に素紀つく小春　一音
山人に酒のあちぬこぱ紀れ　湖城
梅ハに又ちるもめて小春　五綾

俳句て芳聖をのぼる小春この那　万嵐
蹄蹄に年暦ハさぜぬ小春うち　春臣
又名にしてハ日の入紀小春う那　李北
伺もるん聖をあてめ紀小春　粧素
蓑ふ紀義侍梅見ふ〳〵小春　可卿
水茎亟に日の吹ぬけ紀小春　秀律

霰　ぎぐ

紀の星又ぞ〳〵〳〵ぎぐ紀　北枝
二三枚図工る見て晴ぎぐ紀　也有
ぞ紀の清色実りむ神しぐ紀　麦林

接ひらの接くいうぐむしぐれ　希因
陣雲は笠にるる時までしぐれ　去路
遥かの遠くまく帆へ出く去ぐれる方　雁秋
色々に一枝をけめ時去ぐれる方　青齋
椨柿のあるる屋や神しぐれ　雨竹
席しけ弱時頃やひとしぐれ　上毛新四　老西
月も暈に入時うに一去ぐれ　雁志
蓑笠の寶もりふで神しぐれ　百夫
夕照のあてにもるぬしぐれ　蕉帆
仮船をよちうちづも去ぐれ　雲帝
犬獨力おを固うしてゆく雲方　可登

不老見れば笠は寒少時去ぐれ　梅路
村はの城えう日の入時しぐれ　西華
降つづく雨や黎明をきのしぐれ　去弦
蓑の者ありたてしぐ祇この那　後地
去ぐ時やすぐ時を見水を今祇山　貞川
教へ降時く弱水の降や一しぐれ　青祇
山里の日を通まりしぐれ方　萩丈
紹の米降うぬ時しぐ祇う方　深魚
外に来る狩見ちやき去ぐ祇水　壁城
編うくも業祇にたるぬ去ぐれ水　祇亟
回濟に士器五商去ぐれ雪　岸虎

おもしろい物をあつめや神しぐれ　大阜
水僊の盃きるもしぐるゝ那　六柿
きるきるきゝ人と一度に志ぐるゝ小　常陸日因女
三日月は星所うし神志ぐ迄　希因
相は実の吟ゝ〳〵きりしぐる　仝
まのうゝをかへもの夢や一志ぐる　涼俤
りふハ又どちらゝ雲は降むゝ志ぐる　由戸
業一把半にかぬせゝ雲ゝ降ゝ志　希因
ゆくゝ人を一日ゝぶほしぐ迄ゝ志　来川
業笠を行田へゝぐる志ぐ迄小　晩九
山姥の日をかくしてや一しぐる　加賀金沢
杜江

白帽子雲の乾ゝハたく志ぐるゝ志　虎岡
袴をひゝ里ハかぶ降しゝ迄小　麻父
朱迄戸のりゝハ焚小ぬしぐるる小　青柳徐来
時るゝぬ乳母迄も敷や小あ雲　乾什
昏をまゝへふくろや神しぐ迄　阿坡
階除へ来降日もぬ小あしやむゝ雲　常陸国筆馬
禅の嘘今宵雲降しぐ迄ゝ那　相模小田原尾跡
併傘迄ハゝハ秀に志ぐる小事雲　江戸不角
乾に出ゝ扇のゝ降志ぐるゝ志　涼俤
彫株迄薄きそぐ先て神しぐる　仝
あし宵けゝ雲来降あの袴まゝ志　其角

橋史（カヂカキ）の名所をかくもしぐれうち
洋紙（ハナ）で押へ侍るやもつしぐれ　下総佐倉　二水
蒸かしさ大蒸（カシ）樫に煮やあみ志ぐれ　洗雲
歪かへて撥義の笠もしぐれ　冠子
寒うしぐれよ富士いくしぐれあみ志ぐれ　一音
聖（井ノシ）猪に新を加へ軟志ぐれ　近江　章貞
狸（サル）ハまぐ拾ふてのうしぐれ　兎士
背に俵侍柳の傘やあみしぐれ　仝
考（カケ）ぬけうに先に用ふしぐれ　巻阿
身にうけあの本紙やあみしぐれ　李北
一日の宵にさうぬしぐれ　百卉

俗うう日は侍傘やもしぐれ　兎洲
はうさはに葉そうふうあみ志ぐれ　猪史
雪迎に寺はよぶ侍しぐれ　井関　巴山
関まは迎水しぐれうち　祇翠
うしさに新侍ふうあみしぐれ　州羽
柱にくい柿の色紙やもしぐれ　武大梅　其石
栗巣に尾を差せうう蔭来侍雲　眠石
見あり世うう長しを見ぬいもしぐれ　一巌
傘は川紙ううゆくしぐれこの雨　涼宇
仮城のぬくさぐ拂ふしぐれ　白枝
御〳〵西へ日の出侍しぐれ　一巌

又、飛ふ鳥の声しゐ神しぐ祭　仙衣
鶴鷺の巣社沉こもやゝで神去ぐル　不席
原中に一ト筆やゆふしぐル　可昇
かけあぐく雲の形りかぐ去ぐル　再可
鞘あての出船におほき去ぐル　雪叩
猟人の火縄くゝ去ぐ祭ル　笑牛
炭賣に米おほせゝう神しぐ祭　琴詩
山中社里へ行海しぐ祭うな　一鼠

冬日　ふゆのひ

みじゝさゝや梢ゝタ人ゞ日　ハ見ゝぞ　笑林

冬の日や雲橋に雲の人もかし　蘭球
四ゆの日や何もかゝゝぬ波しぢ　武村岡鳥夕

冬月　ふゆのつき

冬ゝ月雑つゝふゝハ粉ふはじ　涼休
水凋て社河社庚や冬ゝ社月　仝
氷ゝせゝゝおゝゝく兎や冬ゝ社月　漁遠
文彩や雲に姿ひいはゝ冬ゝ社月　麥推（伊勢）
花ゝても皆ハかゝゝぞふゆの月　西羊

木枯風　こがらし

おぐらしは一日ぶくに居まにけり　涼兎
本数ほや男ひ出してハ伊勢へゆく　可登
こうしやおそひくに夕かくに　去路
本数ほや掃ぶるを遠くも霞に為侍　魚真
おぐしや池のぬけ数廉まん角　白枝
本ぐしや月ゆきもを忘く水のく　不倦女　あや女
こぐしや打しぬ柳に長ももぐら　涼佛
本数ほや浦の釜（トヽ）を八潮のまま　梅路
こかしやこのぶ後此方（こなた）獲打戸　未了
本数ほや塔きく〳〵吹のうま　上総長南　泥亀
おうしや少えくをこき禮拝者　吼圭

本かしやるれ身にも巣者者　白枝
こかしやゆくこて海へゆく　松琵
本数ほの麦（ハテ）ハあるを海の者　京　言水
本数ほや掴（ツカ）むぐ拝ほもぐめ　麥推
本数ほや潭（ツボ）をづして泉（メキ）滑れ者　一鼠
おぐしやおどろくを遥まハし　秀陽
本かしやを廣い水に行こ海里　千竹
こからしや砂の流る海のく　眠石
おぐしや後（アト）ハかぐへ海禮拝者　武　青長　樹仙
こぐしや星いくこ海遥者　星斗

冬隠（ふゆこもり）

折くに伊吹を見るやあるこゝろ　芭蕉
夏ゐるゝばゝなるゝだゝて　文俤
つくゝゝと壁の兎や姐ゆゝしき　其角
居ゝ冊（サウシ）子かへるやふゆこもり　涼俤
彩子（カケボウ）法不定めゝ婦曲古毛里　青藍
釜うけゝゝゝのいもゝ里あり　白枝
頬杖のゝゝぬハゝし　至芳
ゝぬ皮のゝ法ハあゝ　一紅
年（ヒル）時一度蜂に冥（アケ）ゝあるこゝ　涼俤
法つめゝ紙捨（シヤウジ）に弓やあるこゝ　可由

隠（ケウ）凡に砂糖の蔭やあるこゝ　白枝
炭の滅法白（アヒテ）に冨士やあるこゝ　李北
義（ミノ）貼（ハリ）のゝゝ園（メテ）ゝあるこゝ　古硯
居て重く棚ゝへ言ゝあるこゝ　貞丘
戸（ヒキ）園（メテ）ゝ老の碧戸やあるこゝ　梅荻
芭蕉（バナイケ）のゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　長眉（下毛佐野）
こ法ゝのへ鑿のあゆゝやあるこゝ　鶴阜
はくゝ里本法森見のがして　文東
嗔（ウグヒス）紀多ゝ出法砂生やあるこゝ　王才
風玲に空（スキマ）間のほやゆゝしもゝ　蔦屋（武戸宮）
松ほに蔭ゝゝゝゝふゆこゝ　好古（榛沢）

角ばる屏風に書くうつくしき色を重　烏久
四方山の美さうに書くて色をまし　素絢
うぐひすに紅も俤しゝ紅ゆ出る色　萩丈
紙巾着て上見如鶯や色こゝろ重　百尋
灰に書く俳の形や紅ゆ出る色　思遠

火鉢 ひばち

毋くの炭へうけ火はちぶ　祇徳
指の節ゆしてかざに火鉢ぶ　古山笠
ぶ文理を互に見せ火鉢ぶ　涼洲
背脚の角指てかくづくひはちぶ　潤悌

新法ふやゝにして屏風火をちぶ　紀おさ子 橋
ゑゝ寒ゝ色さぶ火鉢ぶ　吐涼
医者のぶ法ぶつて屏風火鉢ぶ　一嵐
鬚鬼かして座敷の鬼屏風火鉢ぶ　涼宇

炕 つた

蓋をくりくりてまりぶ　破了
宿舎の真中見せくてたつぶ　杉町
仮傑ぶ負てちゝぶ　涼俤
ぶハ優ぶにつゝして屏風炕の形　猪史
ゆゝゆゝぬ新てを方い炕ゝ那　芳徒ゝ方 麥風

偃仆（ネモト）　涼休
袂（ソデ）　三橋
ゆけむさのぬけはおたつぶ　幾暁
蓬の子忘背に面くまたつこのな
賣ほぐの蕣にもるぬ炭この那　水音（城志）
老（トシヨリ）大ぜ一緒をるさこ半ゆう方　一鼠
山城（ヤマシロ）を話（ハナシ）をあぬぼこ　破了
ものぐさい硯のとけはよゆれ　雙飛
働（ヨリ）をへぬあるゆぬしてと炭ゆ方　兎士
さいあのおをゆろ方炭この那　曲州（平戸）
漬ぢして荘るのうつはおゆぶ　公江

種火（ミヒ）　文東
ゆげみ火やかへしてつふ蕣ぜあと　去路
埋火や蕣ハくしてあハりえび　也々
ゆげミ火やかさおほぜるハさし　一巖
埋火や兒（コ）の泣ゆびにいけ亟し　為谷
ゆづミひや隆りぬ計の抜と丁寸　十字
ゆぼミ火やよに懐のあゆま亟　兒洲
ゆげミ火や花ちくゆおかど暖ま亟　東起
埋火や蕣を休むぐひるさよに法

榾柮（ほた）

楷の火や夏〳〵こそてゆく　涼佛
ほゝけ火や山家けてのをぢぐさ　仝
楷の火や梁にやつくたう物　西華
ゐぢけ火やひかりへむ蘇合はう　千林

炭窯（すみかま）

炭ゐやゐ楷に水蓮のむせ煙　涼佛
炭窯や小枝を勝（たつ）ぐさむ草　東奴
すみかまや水窟（ひむろ）の例を炭〳〵　城任寺四素琴

玄猪（ゐのこ）

殘菊宴（さんきくのえん）

殘菊の人にも水を注ぐ酒　千山
天井へ幡ひかるづくゐのこうれ　柳波

殘菊（のこりぎく）の人にも水を注ぐ酒
盞に酒嗜見てゐる菊　涼佛
伊勢射沢其瓜

達摩忌（だるまき）

達摩忌や何に迷ふこかへ華　兎士
達摩忌や何をみるても水よ法　涼佛
達摩忌や極へ向ても心　東西　青蓋

逢ふ夏や摘みくさまくさ　物　乙姫
逢ふ夏や姿をえらぶ新でなし　黄牛

十夜

老婆の京にもおそさ十夜　麥林
蓮池のおそろしい時十夜　涼佛
一もじに炬を出す十夜　仝
蓮ちせ花一時の十夜うな　禹貢
関ちに東情のおそさ十夜　西羊
春米の梅田をあつく十夜　雪叩
西洋のさいハいもぬ十夜　汶上

下向にハ饅頭柿ぬもむ十夜　兎士
木の端と米と栗山ふも十夜　雨皐
彩ふれ一度にうざく十夜　涼佛
はじまりと呪家ハ成ぬ十夜　涼戸

兄比須講

釣仮に西日ハ彩や兄比須講　祇亟
木敷ハに波とまをえびも講　庭城
精舎の布袋ハさびし兄比須講　巴雀
あがしらも俳吊柳や えびも講　去路

紙衾

板がまと紙帳もおとる紙衾哉　京　惟然

蒲かしを水更るのうたも紙衾哉　子堂

漏る雨におぼ〻ぬさやも紀伊もの哉　涼佛

寄屋もとに美しぶしまぶ　尹里

紙衣

椨柿〳〵人にとりかこうる哉　涼佛

世の人は雨をきぶる紙衣哉　去路

くさ〳〵も人の訪ひぬる紙衣哉　春來

木枯の雨を裁縫かみよう哉　五菱

結びを封じてすぶる紙衣哉　雲帆

後〻掃塵の紙をかみこの邪　一風

逐あげの雨へ出事かみよう哉　芋魁

掃せ〻ハ後へふさぐ紙衣哉　可登

あ行の時かころびぬうこかな　山柱（松江新保）

胡蘆のやうに常も紙衣哉　士鳳

間なるの敷をうつ紙衣哉　吼圭

擇舎人はたゝほころびる紙衣哉　眠石

俗あげ里の人は表のくかこまうな　可卿

こゝひうぬ神し男ふて紙衣うな　馬才（堂庵）

種火へるを揉うへはかみこう邪　祖述（上毛榛沢）

今年さかりなる紙衣　素筏
宗祇の偏衣（カタイチ）は性心さく紙衣　眠棠
男もに一ト様おろかみて　入楚

頭巾（ズキン）

袴俗の家にしてゆく沢ゆふ　西羊
傾城に袋へくたのむ沢ゆふ　希因
法師（ツヽボウ）の目鼻も隠てばさむ沢ゆふ　洞居
茶湯（スヱフロ）の湯もうす紙沢ゆふ　眺亦
刹刀は鼻を紙を沢ゆふ　李北
猫入ゝ百目を様を沢ゆふ　東梢

格子へうぶゝ沢ゆく沢ゆふ　涼楓
茶筌を味ゝ張沢ゆふ　涼俤

醤（なと）

ものゝ沢味噌にして醤ふ　洗雪
河豚毒までハゆるさぬ醤汁　乙路
蒲へハ青ゝ醤ゝの邪　徒遠

水鳥

水鳥の一度にまゝ入て鷺ふ　涼俤
多多沢鴨や和歌の沢むゆ　仝

水多や橋小ふ野山ハおぼろこそ　温故

水多や暗さ〳〵江こそ春　西羊

多多のまてハさぶる月ハ上　文梁

紫磐　磐ハとも

紫磐磐ハはもゝやはゝ見て岩ハと　涼佛

をしゝ里や筏のとまるか〳〵里も　一音

亀　かも

江のとに日もうゝ浦や亀ハ春　涼佛

吹あゝ中に春や蓑ハ曇暗　破了

釜　釜ハ中入江の亀に法　蛙里　三夕

水史鳥　ちゝと里

松壺の神酒あてめゝ水史多ル　如本

埋火ハ底ゝよハち中里ゝな　亀士

一ハ時二ハ時ゝ後ハ水史多ル　巴静

ハの実ハ今ゝ見ゆル秋ちゝり　涼佛

蛙　蟬　殼も里ハ　ちゝてちゝり　仝

鮒ゝ釣あゝ〳〵ゝ小ちゝ里ル　素圓

あゝ里ハも冊出ゝ時中川ちゝり　希因

松葉に月あゝちゝて水史多ル　仝

一あるを結ぶもあるにちらるる　一和
さびしさハ叡山もまぬかれぬ　祇徳
又ほのぼのとして春ほちらるる　紀州侯戸曲
行潮の花ハ濃むらで多史多ゐな　一嵐
ぬくめてハ耳ゑまかへほちとりの　曉丹
あゝ海の息まほぼ時や時ちらる　古由
春雲ほまぐ海むでちと程ぶ　伊勢一
吟ぶ鶴へ園へ鶴ぶ和程ぶ　麦林
紙ぶ山ぶ山あるや孫ち少ゐ　涼佛

鷦鷯　みそさざい

目のうちも鶴一る　鶴ンダチ　涼佛
文読ふまゐ美ひりぬ　仝
鷦鷯毎日来て、と只、ぶ　素花
枝ゐ屋く屋にあり　桃雨
鷦の殺をぐ　一巣
節孔をぬけるまの美や鷦鷯　花明
消しに来鶯の御畑やそさざね　迂生
蓮の中をちぐもや英首ぐね　曽平
静さも庭梅の美やみそさざね　秋午
樹梅の果ハ移樹や美ぬけ井　宮叩
名前社杉戸やぬけそそさざね　禹貢

紫紙よ若くまで　鶯　府鳩

鷹野（たかの）

鷹狩や深田の面にかしてまち　涼佛

鷹に又箭差せうと鳴うなり　南蘆

獺（かわうそ）

夕獺や書に色の消ふ時　加賀　万子

獺（カハウ）とうや素麺（ソウメン）祭へ鰯（ムシヒナ）の那　汶上

如かまや素小狐も火を燒し　美濃大垣　怒風

熊穴居（くまのあなこもる）

穴熊や素寒の夜ふ月ひとり　雲和

蚯蟮（かさ）

蚯蟮・ゐろ殼やまを寒ぬ芝に茶　上毛お橋　醉江

沙嘆（かまこ）

百生者と朱ろなまて小　加賀金沢　梅左

山水社ふに居忍ふ法ふ小　白枝

角文字のいくもの夫新田嘆小　涼佛

漁火を鷺くゆにな法これ　仝

蓮(ツリカネ)の海へくぐりけるかはこれ　帝因
なぶるかをかくめたる歌ぶ嘴ぶ　乃丞
篁(ヤブ)に肥(ハフ)てあさるかぶ嘴る　麦林
人記もやうにしるしるしるかまこぶ　書益
面伯方尾鰭(ヒレ)を逆るるかはこぶ　梅萩
系清の流でつゝのむなまぶれ　既侑
梗ゝゝば芽を出しゝかぶ嘴ぶ　換鵜
叩るゝゝしはおぼえるかぶ嘴る　丟芝

麺條魚(ひを)

俳四のをハ破ぶくゞ字治と麺條魚ぶ　祇亟

水皆ひをとに化もあうる者い話　宗鑑
菜席に河豚ひうをる　東奴

河豚魚(ふくと ふぐ)

河豚けや一寮の里しゝ嶺(ヨシカヘリ)生　兎士
河豚けや後(アト)の白豚ぶ色のた先　仝
林(ハヤシ)善医者此(ヒニ)傳(イリ)をう河豚汁　希因
蒙ふくゝとらふぶ鮫(フクト)ぶ那　曽平
鮑(フグ)けや沢中ふぶ洗にゆく　一嵐
如ぐけや人静まつゝ多ひる色　九皐
鮑のなもこしゝりふくと汁　祇亟

魚簾守　あじろ

おゝぢろい罪ハつくゞ魚籠ち　雲郎
水へゝ網（キリヒ）漁もさゝ魚斷ち　柳尾
川中に雲れ雲やあじろり罪　捲網
りされ雲あふてくゝふた魚籠ち　常陸宗貞　得仙
柳ゝふさ後次めやあぐ呂賞　西羊
はひしさハ棄山ふ竟（ハテ）や魚籠ち　相原
網の目も晩ゝぬ俤（ワレ）やあじろり罪　三橋

拓野（かれの）

伊勢山田

何声

見風

涼俤

仝

常江

物語　其蔭

洗雲

青戸

琳李

巴静

雲郎

（イツソヤ）五日社　拓野　この那
犢（ウシノコ）　山ハ　嵩（ナメ）ゝゆく　拓野ゝ　家
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　捷徑　ゝ　ゝ　拓野ゝ
龍贈（リンダウ）の杉　よゝ　ゝ　拓野ゝ　那
簑笠　社ゝ　清ゝ　ゝ　拓野ゝ
家ゝ　ゝ　目の杉　ゝ　野かの杉
杉　先の雲　ゝ　おろそゝ　の杉
簾ぬ家のゝ　ゝ　そゝ　この雲の杉
青ゝ　ゝ　雲ゝ　出ゝ　ゝ　の杉
鈴（リレ）窠（メカ）雲の雲　掴ゝ　杉ゝ　拓野ゝ　れ
杉　家へ人　次　ゝ　ゝ　か　拓の　この那

枯むぐらあけくれ吹て枯野哉　深石

芒穂の多吹こぼす枯野哉　右交（上毛小泉）

村ひとつ霜こぼす枯野哉　似竹

枝よ秀郭立添て丁枯野哉　其舟

寄に倚て力ハりぬうしの尻　白志

郭公の迷ふ原ハ枯野哉　涼風

老て狂ふ蝶ひらひらうしの尻　閑雄

馬ひりてほの栗ぐうしの尻　北川（武蔵沢）

枯芒花

ともかくもうでや雪の枯芒花　芭蕉

枯てうしに寄あはぬ芒花　芳洲（伝使上田）

伏て影ブタ日の斎やうしをぐ分　文酔

海まてハ富士ハもそ雪や枯芒花　耳風

湖に帆ふもそ中ふ枯芒花　涼湖

あ〻りゆ形に敗の石や枯芒花　文下（京）

枯蘆

枯蘆や都の家ゐる日ハをし　破了

蕎麦刈

蕎麦刈やあばうりそばあげろへ直ゐ芒のつく　雨夕（紀州和歌山）

萊菔挽（だいてひき）

下くもとらへて長ほう菜花挽　兎士
ちひさハ清涼殿比貴や菜花挽　加賀金沢 白貴
四五町此度まるあり菜花挽　涼斧
遠山を的（メアテ）にぬ法やだいてひき　祇亟
聖紀束（シゴト）の尾ハ踏まり菜花挽　甘麦
清原も層楼（ニカイ）ハ高ひ菜花挽　一承
落し茶りり松の葉いまゑ　希因
ぬけて徒くひとまを角力や菜花挽　入換
菜花挽古にありぬ事馬だこのつま　素筏

四つにまけて老の矣部や菜花挽　洗吉
清輔くれ矣湯へ返しや菜花挽　涼斧
菜花挽打ちぶ休こ事つま　雨篁
松原にこのつくやだいてひき　有平
山園にかくまを菜花挽　青蓋
足て西法人の励こやだいこひき　去路
夫故にんあてのつま多ゆ矣　口時雄

廿五　蕓挽（かぶらひき）

清法くも松の夏や蕓挽　南部 白扇
続首（ウニデサキ）に拓るもつうばかぶらひき　和水

かけあの瓜ハみじうしゝ　信濃松本　不重

生姜掘　陸奥桑折　可貞
一ト庁ハ濯の粗、幸や生姜掘

麥蒔

麥蒔や却るを遠う朱里　涼佛
麥蒔や一ト畦ハ人むふ　麦水
麥蒔や志ぐして疾沛　希因
麥蒔や兎へ蒔の八茅　百卉
麥蒔や素山ゑ蒔うあうまる　双羽
麥蒔や欲ぬ勢のかしはし　西羊
麥蒔や穂にあやうし枯芝　涼佛
蒔つめて鵜ゑ麥はうけ　仝

素吾花つゝの
手ゆに素の蒲やつはゝ　烏林
蕾にうゝ佛ゑハ素吾花　扶父蒔々

冬牡丹
あ星うけの衣紙やかさ孫て冬牡丹　大和千代
猫の目ハ時親ハせハ幽ゆ冬　栅居

太白は雪でちがむやう　牡丹　涼佛

狂花（かへり）

三芳野や絶（ヨリ）雪の雪ぞかへる花　葉園
能因もりぐ侍りしかへるなり　双飛
一ちらす雪いそぐしやこの雪花　見風
今深く見ても鶯（アサギ）や可歩里波素　青蓋
枯枝へ息のゆくへやかへるなり　上毛板倉花　桃一
かへるなる蘇もせぬ春は雪　希因
焼炭（スミヤキ）火の中あつめてかへるはな　麦舟
たまさしてひゝり炭り雪狂花　飛騨高山　巴游

ぬしてもとつく雪やかへるはな　州羽

茶梅花（ちばいくさ）

茶梅花や雪ふる小枝に添ふ　小見川　徐江
茶梅花や立てバ居士衣に疎（スキ）ー（ホリ）通　祇十

茶花（ちやなる）

茶のむやとがめぬ人のハ打もすぬ　牧丸
茶は花や仮ぐも出さまで火たく多　帝因
茶の花や利休は目にハ芳野山　素堂

金剛纂（やつ）で
降雨（シブキ）もあてぬやはだぐや茶の時　上毛倉賀野　烏竹

枇杷花（びわのはな）

夏冷（ひや）やかものを今うら枇杷花　吳江
紅蝶の糸（いと）さし次（つ）ぎし枇杷の花　司雅
菓（サネ）梅花（ウメノハナ）ついでに見ばや枇杷の花　琴詩

鬼箭（にしさぶ）

あしこさぐやてぶしくて赤ふたり　奥仙臺　菓二
にしこさぐやちづくも松のい張　此君

散紅葉（ちるもみぢ）

寒くて人へ夕日の岩や散りもみぢ　紙屋梅彦　楚角
降の多きうも見えに散るもみぢ　仙壽　左洲
惜まれぬ渦（ウヅ）のぐるにや散り紅葉　一音
山門を辟くにこもるもみぢ小　榎雪
一雨をつまんで落ぬ紅葉小　画洲

落葉（おちば）

はびこりさハたるにしても落葉小　巴静
淀（ツリカ子）は一口吐く落葉うち　笑牛

松葉の葱をくぶる蔭 葉ゝ那　一音
不老かくもとびたて蔭 葉ゝ　白枝
跡に古い和とハ見くぬおちたゝ那　函嶽
見ゆるもに百日おもたちば この那　大阜
日の陰は猫ゝ蔭おもく 葉ゝ　下毛野ノ国 靜山
長あゝ皆にむふまで蔭 葉ゝ　一嵐
地を走る歌りの巣にる蔭 葉ゝ　恨瓜
先ゝ山ゝ重かくもれちたゝ寄 李北
水に浴は枝はけゝ蔭 葉ゝ　晩帆
量だゝ地をあつゝ蔭 葉ゝ　三檜
見走につもの出事陰 蔭 葉ゝ　汲水

陰上へ日はかゝつけゝ蔭 葉ゝ　玉貞
解いの陰をくゝ陰 蔭 葉ゝ　古山
宮ゝ社ゝてあ甲ゝ影 蔭 葉ゝ　斗光
今陰くゝ地ゝ迄ゝ陰 蔭 葉ゝ　青蓋
松結へ丸つゝて見ゝ蔭 葉ゝ　巴臼
種樹に新の葉ゝ陰 蔭 葉ゝ　百道
見ゆゝもにはのかゝ影 蔭 葉ゝ　甘竹
庭かゝは枝のそよゝおちゝ寄 一轂
水仙に夜の出来部松 波 東南　能登七尾 合浦
ほめて来ゝ於田をかゝくれちばゝ　同 睡龍
やりゝゝに橋こゝらゝ陰 蔭 葉ゝ　可樂

大きなる形におちたる耶　乙路
精出しく見てもおに入る蕨哉　巻阿
仏様の踏るけさうに松ちはの紅　奥郡山園中
紅葉のはうをめぐる蕨哉　艸羽
あぶりの弱ふしに蕨於也波来車　二江
家出にあの呼く来る蕨葉　涼俤
影ふみ多はみとして蕨哉　仝
逐電屋の伊あし出して蕨哉　白水
鬼石を第の渡をおちたる耶　芭叩
たづねは来に蕨哉　麥林
乗の月たきたるけさ蕨哉　仝

冬木立　ふゆたち

海見くる乗船　仁史
三芳野も紙衣の色や冬木立　乙路
冬木立鬼の住家もあるべし　梅路
白壁の一軒をしる冬木立　起風
鉢伊のうるる洗ほや冬木立　洗吉
山彦のたぐひ雲や冬木立　涼俤

枯柳　かれやなぎ

よき文く柳もさびし枯やなぎ　涼俤

枯柳霜いとゞいとゞ別もせば　笑林
枯くさ〳〵木の陰ゆゑぬ柳　五仙

寒　ふゆ

松かさの水をもとゞ新きさう哉　尤十
霜ハ今苔もやしきはむさぶ　一音
茅家のけいとも冴てをすさう哉　双龍
奥底も寒ぬ文さや海の青　宇川
起ぶ〳〵寒ハもどさきこの哉　魚士
口ずさにあぶしこの哉　丁史
影ぼうしの曲人合まふさむはう哉　上毛桐生百蛙

立寄れ雨をのうれさむはこのれ　西華
陽計に糸の西ぬはむさぶ　伊勢桑名　桃隣
物寒に火鉢の言きさうれ　凍鉢
夏蔭の涼しきぬさう哉　杉洛
袖の背をたくはむさう哉　可由
寒かるまこの吟ふきもきこれ　雲和
練ふあぶるをうしうるてきさう寒　嘯山
柳に低いも限はむさう哉　未了
巨燈へ形のきつぬきこの寒　桂露
るを搗い寒蘭の庚きさぶ　涼素
扶のあぶ直絵もついてきこれ　糸汀

菜てをくいかしてすまるかさうの那　粗藝
とゝで大ユのるさきむしうか　百卉
緑揚てつらゝの墨はしむさうか　西華
袖に蓋のさすかさうの那　凉宇
稿へまゝ人きはやさきさゝ　眠石
居に燻首おゞえはさむしうゑ　漁遠
松沢に皆鶴ふてさむをう那　王才
松系のをうまさうの那　文東
ゆゝ清士の遊びはきしの那　一亂
埋火の下へ文紙きさこの那　深城
日系の小琴にいそくきさゝ　西蓋

老僧に碧のもゑはくきしう那　杜門
九ふのちゝ小米ゝかさむしう那　汝之
乾過鎌魚の戸に小あるかきゝ　黄牛
雪の尾まん被へきいかきゝ　城石
牡国い油衣のうゞくきしゝ　破弓
花大もひきためてみかきゝ　東起

冬至

挿花に一陽ぬかむやうだうか　梅路
埋火も拙小でしをゞにみをゝ　白陀

冬至梅

日暮の狂ひそめりて冬梅　汝土

暦賣こよみくり

月を笑ふ年も写し暦賣　武八幡山　夏甘

霜

行脚に針をくくと霜ぬ　去路

水晶も日ハとりて霜ぱしら　柳油

水仙ハまゝ霜や志ものはな　癸林

霜の殼を弓ハ見ぬ殼ぬ霜　加賀　大睡

砂霜や物の光星を屋さて　祇函

耳にすゝ祇ハついて霜　あゝ右

そつと屋く祇に霜あ原霜　あゝ右

芝くさを喫出も馬やゆ出る霜　甲州　明大

樟の滴やおちて志をはしら　伊勢　賢浦

紀獺ゆ墨精のあゝや霜のそれ　沈壱

蓊茶史のく侍ぬ霜ぬ　安里

神霜や鍛ハ消をやゆさけ霜　漁遠

泡火の焚ゆゝ霜ぬ　兎洲

菖の葉ぬ苦見きゝりゆけ志ゝ　阿僧

柱へもきゝの徹ぬ霜志　李趙

芭蕉

沈壱

榾柴(ホダ)は火の粉(コヒ)ばかりの雪あり　其梅

筏士も二月三月家ばかりのしを　上毛伊勢崎　矢庵

絡糸のえんえんとあるしもあり　相模小田原　桃巴

初雪や菜園荒りて白ら雪　野坡

雪　ゆき

初雪や鍋焼(ナベヤキ)ハ赤(アカ)ぶい　江戸　泊山

ふくふくと文(ブン)ぐ中ハ門　信濃　去来

いざぢぢ雪見に出ぶ変まぐ　芭蕉

家ひとの雪うち出ぶり絡の声　大至

初雪や夏ゴ松もそぐまぐ　宝永　利牛

初雪やまくりぬ橋川　如本

初雪や大ゴにお詣ぶ亀(カメ)の緒　仏法僧　洞芝

初雪や花ちぢ児ら岩に泣く　左菊

初雪や柳の箸ハ出ぶ泣ぶ　麦舟

枝炭も折ぶ色しあの白武　武州　桃仙

ふゴさ泥田の旭やりさ雪　芭叩

初雪やちぢに雪ぶ人ハ逢　艾角

酒ゴまく兵士(ツハモノ)ひとりあのゆき　巴江

粗(サル)飛(ヒ)ぶ庁枝まし白武松　涼光

弓伏(セ)ぶ藤ぶ雀や竹の雪　和昭

あくさびしく雪に雪しく雪ぶ松　柳孤

神香や薬とはうちにおかの松　百卉
住吉の橋囲めりまそ鏡ゆふ武　白枝
神香やはるゝ〳〵あとおもりしぶぞ　伊勢又桑名　柳英
おろ〳〵さハ雲の音箱やりさ社雲　昨素
神香や絶家へつゝしと水鶯の　源俳
形ふる梅の形やあのゆふ武　仝
神香や先吹とて竹に巡く　仝
香の日や見るも椎社まで晴　武蔵谷　文隣
香さゝぬ人のもあけやりちのゆき　雨石
月蔭て狂一いろやあ　麦曲
物焚き座に香あり竹の香　浅市

薬牛苑の梅暗ハかへるぞりちに社雲　上州徳川　爽馬
焼狂原林薬さへりさまけさ社雲　艾梅
神香やつめるさ八目の底にあるて　素園
芝に手原美の下やりさ社ゆき　素梅
末も竹を撓まぬるもそ鉢の香　香磯
神香や先厩うゝ消し神原　許六
影木香の柱へ寄りそ鉢の香　乙孤
袖吸ふゝ歩りり香見やりちの香　李北
神香や漑ぞうゝおそ俳し紀　江戸郊外　郊
衣の香さとてぼるハ伝多ぞ　京　紹巴
りさ社香かいぐ橋のうゝりそめ　下毛佐野　勇尾

宮川ぬしそそ[illegible]の人なれ[illegible]の屋　上毛古田　浣江
初雪や降かしをれ小の[illegible]　麻又
先[illegible]又新雪[illegible]あつさや標澤　音蓋
そ[illegible]ハ又[illegible]ま[illegible]ま[illegible]雪[illegible]　兎上
雪は宮に絶[illegible]の多[illegible]の雪　孫俳
雪の[illegible]も粗[illegible]ハ[illegible]　川夕
初雪や撮[illegible]に[illegible]　甲覇
遊[illegible]もせぬ雨の陸[illegible]　可卿
塔ひ[illegible]記し[illegible]の雪　乙孫
作[illegible]に幣の[illegible]やそ[illegible]の[illegible]　木路
雪にして不二[illegible]の雪　常陸土浦　石牛

霰　あられ

階除　エシサキ　白枝
除堦に稀の[illegible]　州羽
[illegible]を[illegible]　冬渉
[illegible]いて[illegible]へ[illegible]　五菱
[illegible]の沸[illegible]　信濃高遠　木志
作[illegible]の油で[illegible]　青戸
碁の[illegible]ゆく霰[illegible]　武松山　雲砂
[illegible]霰[illegible]

氷柱　つら

順のひぐらしの声　去路
氷柱を水にてみて見れば氷柱　小枝
篠本に水のふるかはつらゝ　麻又
滝あるにつまむで見るに氷柱　放閑
外にるのくりて落る氷柱　源宇
春来の後。ゝわれるはらゝ　洗雪
掛船の舟はゝ板はつ氷　破了

氷

こほり

きて寒ゝ程にるの泉ゝ氷　深魚
氷にあや船とゝ出べき砌まゝ　雞口

一ト川松ゝのに氷ゝ氷ゝ那　江戸春来
氷をふ傍にもゝ氷ゝ那　扇文
魚板に水の鱠や落ゝ里　柳四
中絶へぬ許田の金や落ゝ里　洗雪
柱蓋の日を見てゝ氷ゝ　峨亭
氷の阿へ河むゝ程ゝ那　多来
きい表を寄ゝ見ゝ氷ゝ　文東
水の洞に獲ゝ出ゝ　其梅
渕ハ今ゝ本の蓋に柱氷ゝ　西華
を里つめて底の洞ゝ水氷ゝ　没上
水氷あやたゝ出ゝ　一嵐

いろ〳〵の梢を極めこほるゝか　白枝
画のやけ原にして霜く水ゝか　眠棠
石山に藁の延ほこ不里ゝ那　一音
孝行の殘るにハ見ぬ水ゝ那　武志国見郡　蔦
ほのまゝ孫つゝ咲ほ不里ゝか　信濃上田　琴宇
達磨（フリカ子）ま山里へまゝ奉ぬ水の那　西羊
接信の田徳言て咲ほ不水ゝか　一蘭
蓮紅乃至ゝ勤くこほ里小　城彩郡　井波
水杓（ヒシヤク）てハいゝよしぬまを不里小　柳水
田の隅にゝゝろゝ咲ゝ那　江戸　香魚
鯉鰐（ブナ）に眼瞼（ブタ）の出ほ原水ゝ那　下毛作壁　可笑

笑かりて手さを叩くこ不里ゝか　琴信
蟹（カニ）屋（オク）や泡ぶ（ブ）に利ほハゝほば里　秩父大宮　柳波
猪（たゝ）ま（まき）
猪ま屋や下ゝ里ゝ肩も下りて行　杉町
猪ま屋や叫ゝぬ里ゝ松ゝ里ゝ記　上毛高崎　東里
猪ま屋や聽（ガク）出してハめでゝが里　芭叩

神樂（らぐ）

表神楽や　象鼻ふくさ　假面せよちち　其角

里神樂（ぢとかぐら）

むつ〳〵さ　松ゐも見えぬ　星かげ〳〵　昔元

素篇祭（ふいごまつり）

酸の出ぬ　新しく　ぬいでは　つりぐ　蹴出兎由

神鼓（をちたさ）

今までに　いくつ破　さで　神多　乗　兎士

青の出ぬ　鼓のひや　神　たく　乗　涼佛

逢がとめて　刹鼓　しさで　神たくさ　一嵐

鑵は　破れ　後　光やをちたるを　素山

點滴（アヘタレ）の　おりくやし　神　〳〵さ　儿山

あぶなさに　涌るハ　あげで　神　鼓　雨堂

ひや〳〵と　ふれ　ぬ　ひや　神　鼓　意山

ぬりねぐ　節ぐつかぬで　神　〳〵さ　多少

佛法の　金ハ　〳〵ぐやはち　〳〵さ　梅尤

牛ようも　ぬ　てやほや　神　鼓　希因

意　塩ハ　七ツのかた　神　〳〵　麦　麦浪

放蕩（ヒャウタン）ふ　後生の　経やをちたる　麦　百川

いろ〳〵の　瓢（フクベ）は　〳〵や　神　〳〵さ　柳居

門番しなかうりや　神歌　　祇園鳥桂

船蘆も酒かしげし神たゝえ　　子永

伊勢の国のなぐさみぞ神たゝえ　　雁平

あはきをかうまぬ祖師や神歌　　雲卿

是なかいもかい新しはちたゝえ　　乙路

おなかかいもぞ波とゑ、幾　　芳河

百八の寄やおさへく神たゝえ　　波光

濃多　ぬくめ

船はへ若にも法しぬく先多　　伊勢山田　季覧

神のまも伐多原あぞぬくめ多　　里楓

向嶋　アケカタ

西羊

迎くぬ先ぬくめ先中里

迎くぬ時や旭にぬくめと里　　芙蓉

是ハ又稲ふるをぬく先ぬ里　　洗雪

拍かく法時や大半にぬくめ多　　涼俤

海鵜捕　くぢら つき

迎つめ法ぬもるく海船捕　　直宇

鯨尾ぬくして近くや海船つき　　汝上

水僊　スイセン

水仙や　炉　炉へ　炉　をさめにゆく　　露蝶

水仙や鏡鏡で見ても線さうの　雪叩
水仙や遠磨もかふ軸の書　李北
水仙や月の勤うぬ時や水仙花　石馬
水仙や雲いうう花おして見る　可々
水仙や燈掃うう狂ふし　多久

寒菊

うう菊や糠のかゝる白き　芭蕉
うう菊や まうて うう香にてげて　乙孤

寒梅

うう梅や春のかにあうまま
燈掃の後で目をあけ梅のうう
まうまうぬ夜明も美し梅のうう
世ぬがと花のハうしうめはな　涼佛
ふふうう来のうう　素堂
酒ううう飛びのハ目し梅はうう　里郷
紙うう書はうう　花来
たうう家は唐や多のうう　五菱
逢が都も来つむ花や多のうめ　二毛
涼佛

臘梅

涼佛
兎士

埋梅や あも淋さぬ 花のいろ　伊賀上野 土芳

冬山茶（かんたさ）

冬山茶花　斗米

寒垢離（カンコリ）

寒垢離や 夏の姿はおそろしく　西里

寒垢離や 人は寒さを消して行　雨篁

寒垢離や 一に紙ぎ分を固め　伊山

寒念佛（カンブツ）

寒念佛を 弘して行や 寒念佛　買明

寒念佛（コブシ）の 戸の冢（アナ）くぐる 寒念佛　涼佛

寒道（ッジ）へ 出て 活に出るや 寒念佛　涼楓

白嘆（アナカタ）の西ハ 出ますぐ 寒念佛　白枝

子に 出さぬ 寅まで 寒念佛　汲上

年 塚の 底へ 徹（ホ）ぬる 寒念佛　東起

寒の 夜 信（シント）れ 紙や 寒念佛　古由

檜へ 出て 徒に 待や 寒念佛　堂僧士佛 至志

法 あぐ 寒の 凡夫ぬ くし 寒念佛　邑叩

日の くちに ゆ ぐんを したり 寒念佛　一嵐

寒蟲（かむこゑ）

きりぎりす　秋に明ぬる　なかなもつく　涼徒
きりぎりす　嘆（カレ）く　伏（ナレ）ぐ　火に　あらぬ　吐雲

鶺鴒（かさゝぎ）

鶺鴒の　巣や　稽（ハ）ぐ　い　書　打　奥素打
鶺鴒の　巣や　稽（ハ）ぐ　い　書　打　車

節季候（せきそろ）

節季候や　夕日の　影　さ　帰　柳居
節季候や　何を　さ　入　ぞ　一風
節季候や　息の　月に　稽　ぐ　書蓋

節季候や　頭巾も　持　ぐ　いそがし　或　麦舟
節季候や　笛ひに　酔　さ　新て　新　一紅
節季候や　いらぬ　狂言　う　な　保　乙鶴
節季候や　立　如　ぐ　ぬ　影　ぐ　し　涼徒

臘八（ラウハチ）

臘八や　流　ぐ　水も　こゝの　いさ　ば　楽園
臘八や　野　そよ　と　枯　花　花　嘉舟
臘八や　日（ヒ）　さ　さ　ぐ　山　か　し　も　吼圭
臘八や　瀑（タキ）　水　や　つ　て　陣（ダ）　体　時　恢午
臘八や　ま　ぐ　ま　眠　の　書　書　毎　大睡

雞卵酒

蓋のうち象りて蓋や鶏卵酒　上毛　九江

藥餌

軍書うち見出しさも珍しき藥餌　士喬

児紫草ハ尾を欲しくなるや藥餌　鐵夫

胴中火ゑど敵に利うる藥くひ　漁遠

寢衣出して胴の用ゐや藥くひ　九皐

配剤を猫にかくうちや藥くひ　一嵐

猟人に弟るも徒より藥くひ　玲二

看経の代参もあり藥くひ　汝上

拳勢うち孫のうちやさよ藥くひ　涼佛

法かも屋ゐるまでやうちゐる藥くひ　西華

煙掃

大思ひ負瞳や煙もらひ　麥林

煙うちさやや何ゑへるも奏焼　嘯山

竹にもむ人をうえうち煙掃　涼佛

訪年のたきそめてやうち煙ぼうゐ　仝

夢衣で要治彩や煙ぼうゐ　大戸（彼任ゐる四）

うちぼゑや無ていの物の射よ煙　入楚

古況ふむ女はゆうしゅ　蝶角

煙もくさや菖蒲をつるす　江戸　曽代女

梅梅をつまむで茶うす煙もくひ　青梅　女せん

仏壇のむろに入ルひや煙　掃　維城

煙掃や紙ハ濡もとゝろび　破了

煙掃や用のあるは部屋く屋敷　素鵬

煙掃や柳橋の日もあうぎ　意山

煙もくひや夜のゆ　法ゐ人善ひ　一鼠

餅　餅

餅つきや見く居ぬ目と花　加賀金沢　乎哉

歳忘

白粉袴さくしをしくしをしくし　多少

小袖の歯を濃法人や白くもくし　法雨

おぼゆるにおまぬはをうまくもくし　示行

鑢

物、骨もまけしと角や鬼やらい　出羽秋田　知乙

歳暮　霊祭

畔碎くやうゐ法米や餅　席　江戸　露井

多緒の手原日もをし　灵　参　　同　士

裙帶菜刈神事

水底へ御供のをや　裙帶菜刈　　汶上

年籠

鶯の岩も去さるに年てを里　　汁光

以かゆ二見の春や多ても里　　梅墨

年去り里ぬのはつ成ぬ去ろくと　　珠李

寶船

一瓶にあまり原梅や多ゝ　　法充

歳暮

花多ぬ賣や物貴に赤海鰐　　栁居

ゆまでの間を去ぬし多ゝ去閑　　去路

雪ひとく松よかり里て年ぬ蕎　　以秀

あちゝ誠えくんし多の坂　　雨篁

油淵ぬ急ぐぬいろや少ぬ社ぬ　　茶仲

松枚のと野をぬしてもぬ　　馬光

乾柿のく粮も濁さ多ぬ果ぬ　　祇亟

りぬさゝに達達もて原多果ぬ　　祇棠

四季(ダイ〳〵)桃の枝へ下りうり年のくれ　以言
さりぶくろの皆物貫しうれくれ　雪叩
おくゆの殻(ヤゴロ)もちらしタかゝも　西年